

ディケンズ「貧しい親戚の話」 マイケルの語りの彼方

田村 真奈美

チャールズ・ディケンズ(Charles Dickens)は、一八五〇年から発行された雑誌『家庭の言葉』(Household Words)の編集長を務め、毎年クリスマスの時期にはクリスマス特集号を発行した。これは後に『家庭の言葉』が廃刊となり、代わりに『一年中』(All the Year Round)誌が発行されるようになってからも続き、この両誌のクリスマス特集号のためにディケンズが書いた短編は一八六七年に一巻本にまとめられて出版された。その本にディケンズは『クリスマス物語』(Christmas Stories)という題をつけたので、これらの物語はその後「クリスマス物語」と呼ばれている。この「クリスマス物語」は、一八四三年から一八四八年まで(一八四七年を除いて)毎年クリスマス近くに一冊ずつ出版された、『クリスマス・キャロル』(A Christmas Carol, 1843)から『憑かれた男』(The Haunted Man, 1848)に至る一連の「クリスマス・ブックス」(Christmas Books)とは別物である。

『家庭の言葉』の三年目(一八五二年)のクリスマス特集号に載ったディケンズの短編の一つが「貧しい親戚の話」('The Poor Relation's Story')(1)である。一八五〇年、五一年のクリスマス特集号にディケンズが寄せたものは、物語というよりは「印象スケッチ(impressionistic sketch)」(2)というべきものだったが、一八五二年から、クリスマスの暖炉の火のまわりに集まった人々が順番に話をするという設定で、ディケンズを始めとする幾人かの作家が、その一人一人の物語を担当するようになった。この一八五二年のクリスマス特集号の巻頭を飾るのが「貧しい親戚の話」である。

この物語は、主人公の'poor relation'ことマイケルが、クリスマスに親戚一同の前で自分の物語を語る、というものである。物語自体は、ディケンズのクリスマスものに典型的な、「クリスマスの夢想」を描いている。ディケンズは「クリスマス・ブックス」と「クリスマス物語」を通じて、読者に、クリスマスの時期には憂き世を忘れて、空想の世界に浸って幸せなときを過ごして欲しい、と願っていた。「貧しい親戚の話」でも、読者はマイケルとともにつかの間の夢の世界に入っていくことになる。

マイケルは、彼曰く「自分の他に敵はいない(nobody's enemy but my own)」ほどのお人好しで、人をすぐに信用してしまうために、共同経営者に騙されて事業には失敗し、婚約者には裏切られ、結婚に反対していた伯父には勘当されて遺産相続の見込みもなくしてしまった、と世間には思われている。ところが、クリスマスの暖炉の火の前で一族を前に、彼は、世間の考えている自分と本当の自分は実は違うのだ、と語る。伯父には勘当されたものの、愛する婚約者と結婚して「城」に住み、子どもも生まれて幸せな暮らしをしていること、また、共同経営者は彼(マイケル)の欠点を補ってくれ、共同経営はうまくいっていることを説明するのである。そして、クリスマスの時期にはほとんど「城」から出ることはない、とも告げる。ところが、親戚の一人に「城」のある場所を尋ねられたマイケルは、「私の城は空にあるのです！(My Castle is in the Air!)」(3)と答えるのである。

「貧しい親戚の話」でまず気がつくことは、ディケンズの「クリスマス・ブックス」に典型的なパターン、すなわち、物語の最後でそれまで語られてきた苛酷な現実や暗い将来の見通しが一切否定され、ハッピー・エンディングを迎えるというパターンに、ひねりが加えられていることである。この作品では、初めの部分で、世間の人の目に映る落伍者としてのマイケルの姿が手短かに説明されるが、それはマイケル自身によって即座に否定される。そして、マイケルは「本当の」自分の幸せな生活を詳細に長々と描写してみせるのだが、最後の'castle in the air'の一言で、彼の語った「本当の」生活は架空のものになってしまう。つまり、この物語は二度の否定を経るわけで、「クリスマス・ブックス」のハッピー・エンディングとは対照的に、マイケルは幸福な生活の夢から醒め、孤独な現実へと引き戻されるのである。

この小編でもう一つ面白い点は、語り的手法である。初めは、物語の登場人物ではない第三者の語りで始まり、主人公マイケルは「彼」として登場する。

彼はそんなに大勢の立派な一族の皆の前で、一番に話し始めるなど、とても気が進まなかった。クリスマスの暖炉の火のそばで大きな輪になって座って、皆で順繰りに物語を語るようになっていた。彼は遠慮がちに言い出した。「当家の御当主のジョン」(そのジョンの健康を祝して乾杯させていただきます)が始めてくださった方が適當なのではありませんか、と。と申しますのも、私は先頭に立つのが非常に不慣れなもので。しかし、ここで皆が「あなたが始めなさい」と呼び、口を揃えて「あなたでいいでしょう。早く始めて」と言ったので、彼はもみ手を止め、肘掛け椅子に座り直すと、話し始めた。(p. 25)

次の第二段落からはマイケルによる一人称の語りで、これが結末の二段落を除いて全編にわたって続くが、ところ

どころ途中に、まるで戯曲のト書きのように、三人称の語り手の説明が括弧付きで入ってくる。

私はきっと（とその貧しい親戚は言った）私がこれから告白することで、お集まりのわが一族の皆さんを驚かせてしまうでしょう。とりわけ当家の御主人のジョンを。彼の今日の暖かなもてなしに私たちはいたく感謝している次第ですが。（p. 25）

もし私が間違っていなければ　もし間違っていたら、お集まりのわが一族の皆さん、訂正してください。間違えることは十分考えられますから。（ここでその貧しい親戚は、反対してくれる人がいないかと、穏やかな目つきで見回した。）（p. 25）

そして、マイケルの語りは次のように結ばれる。

以上が私の城であり、城での私の生活の本当の詳細です。私はよく小さなフランクを私の城へ連れて行きます。私の孫たちは彼が来ると大歓迎で、一緒に遊ぶのです。一年のうちのこの時期には　つまりクリスマスと正月には　私はほとんど城を出ません。この時期から連想されるものが、私を城に引き留めるようで。それに、この時期の教訓が、城にいた方がよいと私に告げているように思いますし。（pp. 34-5）

この後、語り手はマイケルから三人称の語り手に突然代わる。

「それでその城は　」一同の中の誰かが、まじめで優しくそうな声で言った。

「ええ、私の城は」その貧しい親戚は言った。依然として暖炉の火を見つめて、首を振りながら。「空にあるのです。当家の御当主のジョンはその城がどこにあるかを正確に示してくださいませ。私の城は空にあるのです！　これで私の話はおしまいです。話の順番を次の方に回していただけませんか。」（p. 35）

この三人称の語り手に挟まれた一人称の語り手という形式は、暖炉の火を囲んだ人々が順繰りに物語を語るという、この年の『家庭の言葉』クリスマス特集号の設定を強調する役割をもっている。「貧しい親戚の話」は、先に述べたように、その号の巻頭の短編なのである。

以上の二点が、「貧しい親戚の話」の特徴だが、実はこのクリスマスのための小品の特徴は、ディケンズの想像力の源を垣間見せていて、ディケンズにとって「物語」がどれほど重要であったかを知る鍵となっている。

この作品の結末において、マイケルの話は架空のものであることがわかった。つまりマイケルは親戚という聴衆を前にしてフィクションを語ったことになる。彼の語りは、初めは状況説明に終始するが、やがて強欲な伯父が登場する辺りから、語りの中の登場人物たちがしゃべり始める。辛辣な言葉でマイケルを怒鳴りつける伯父、心優しく誠実な恋人のクリスティアーナ、言葉巧みにマイケルを操る共同経営者のジョン・スパッター、マイケルになついている少年フランクが次々に登場しては言葉を発する。しかも、伯父も、クリスティアーナも、ジョン・スパッターも、饒舌である。しかし、これは全てマイケルの語りの中のことなのだから、彼らの言葉は、実際にはマイケルが言っているわけである。老若男女揃ったこれら登場人物を、まるで一人芝居のように、マイケルは一人で演じ分けている。

また、三人称の語り手に挟まれた一人称の語り手という形式もまた、この物語全体に一人芝居の雰囲気醸し出している。三人称の語りがあるために、一人称の語り手の存在が読者にはっきりと意識され、また、彼の話の聞いている聴衆の存在も意識されるようになってきているからである。もちろん、すでに複数の批評家によって指摘されているように、この語りの形式に、ディケンズが子どもの頃から愛読していた『千一夜物語』の影響があるのは確かである（4）。しかし、これから見ていくように、この語りの手法には、もう一つディケンズが子どもの頃から親しんでいた演劇の要素もある、と思われるのである。マイケルの話が作りものであったとわかるのが、つまり彼の「私の城は空にあるのです！」という言葉が発せられるのが、マイケルの一人称の語りが終わってからである点にも注目したい。自分の語る内容が作り事だということを、芝居の中で役者が言わないように、マイケルも自分が語り手を務める部分では認めてはいないのだ。

マイケルの語りは、物語の設定上、口頭での語りであることを強く意識したスタイルで書かれているが、彼の語りには登場する人物たちはそれぞれ独自の話し方をしており、彼らの言葉は語り手マイケルの口調の影響をまったく受けていない。他の人間の言葉を話すときのマイケルはその人間になりきって話しているのであり、聴衆（そして読者）にそれぞれの人物を鮮明にイメージさせることに成功している。

この一人芝居にも似たマイケルの語りからは、ディケンズが晩年行った公開朗読が連想される。ディケンズは読者と直接触れ合う機会を求めて、自作の朗読を思いつき、ロンドンのみならず、イングランド各地、そしてスコットラ

ンド、アイルランドを回り、ついにはアメリカにまで朗読の旅をした。この有料の朗読の旅が始まったのは一八五八年のことだが、その前にもプライベートな場で友人たちを前に朗読したり、あるいは慈善の目的で公開の朗読を行ったことはあった。慈善のための公開朗読会を最初に開いたのは一八五三年十二月で、「貧しい親戚の話」が書かれてからちょうど一年後のことである。読まれたのは『クリスマス・キャロル』と『炉辺のおおるぎ』(The Cricket on the Hearth, 1845)で、どちらも「クリスマス・ブックス」の作品だった。自分の作り話を話して聞かせる「貧しい親戚の話」のマイケルの語りには、自作を「朗読」する作家の姿が重なるように思われるのである。

ここでディケンズの朗読が一体どのようなものだったのか、述べておかなければならない。一般に「朗読」という言葉から想像されるスタイルとは、やや異なっているからである。ディケンズの公開朗読を聞いた人々の感想・批評を、ピーター・アクロイド(Peter Ackroyd)は次のようにまとめている。

それでは、朗読が始まったとき、聴衆は何に気づいたのか。まず何よりも、このような機会のために訓練されたディケンズの声である。いやむしろ、それぞれの登場人物のための別々の声と言うべきか。高く暗いポール・ドンビーの声、ギャンプ夫人の熱心ぶった、しゃがれ声、ピプチン夫人のがみがみ声、"respon-see-bee-lee-ty"と言うときのバズファズ弁護士の大げさなアクセント。フェイギンになるときは「しゃがれた、軋んだような声」を出し、聴衆の一人の記憶によれば、「ユダヤ人の舌のもつれた発音と三〇年代のイースト・エンドのコックニー」が混ざった話し方をした。……この同じ人物によると、彼は唸るように話し、「何度も聴衆を震え上がらせた。」(5)

ディケンズの朗読は、まず声に特徴があった。登場人物が話すところでは、それぞれの人物になりきって、声も話し方も変えたのだ。そうして、それぞれの人物を生き生きと聴衆の前に、今度は音声で描き出してみせたのである。このほかにも身振り(特に見事な手の動き)、くるくると自在に変わる顔の表情が聴衆に強い印象を与えたようである。フィリップ・コリンズ(Philip Collins)の『チャールズ・ディケンズ 公開朗読』(Charles Dickens: The Public Readings, 1975)には、公開朗読を聞いたカーライル(Thomas Carlyle)の感想が載せられている。

カーライルはこう述べている。「ディケンズの朗読を聞くまでは、人間の顔と声にこれだけのことができようとは思ってもみなかった。どんな劇場の舞台で見るよりもたくさんの役者が、彼の顔の辺りをよぎっていったし、あらゆる調子の声が聞こえた。」(6)

どうやら、身振りは手の動きを除いては抑え気味であつたらしく、聴衆を驚かせたのは、一人でさまざまな人物を、声と表情の変化だけで演じ分けたことだったようである。また、朗読とはいってもディケンズは、本こそ手にはしていても、その文字を目で追うことはほとんどなかった。特にアメリカ朗読ツアーの前の、イングランドとアイルランドの朗読の旅(一八六六年)の前には、朗読をより一層成功させるためにテキストを全て暗記した、とジョン・フォスター(John Forster)への手紙に書いている(7)。以上見てきたことからわかるように、ディケンズの公開朗読には、かなり一人芝居に近いところがあったわけで、彼の書いた小編の主人公マイケルの語りと共通の特徴を持っているのである。

これは偶然ではない。「貧しい親戚の話」が含まれる「クリスマス物語」群とディケンズの公開朗読の間には、深いつながりがあるのだ。公開朗読の出し物は初期の作品から後期の作品までヴァラエティに富んでいたが、公開朗読を始めた頃のディケンズは、演目を「クリスマス・ブックス」と「クリスマス物語」の中の作品だけで構成していた。ピーター・アクロイドはこの点を次のように説明している。

これらクリスマスものの物語は、彼と聴衆を結び付けるのに最良だと思われた。それらの物語が、読者に直接、親密に語りかける形で書かれていたからであり、彼の小説ではこの語りかけが余りはっきりしてはいなかったからである。(8)

このように、クリスマスものの物語は、もともと作者が読者にクリスマスという時期にちなんだメッセージを送るためのものであったし、クリスマスに暖炉の火のそばで家族揃って音読されることを考慮して書かれたものだったので、朗読に適していたのである。「貧しい親戚の話」自体は決して公の場で作者によって朗読されることはなかったが、クリスマスを祝う個々の家庭で朗読されることを作者は念頭に置いていただろう。それならば、作者自身の朗読スタイルが、物語の中で親戚一同を前に自分についての虚構の物語を語るマイケルの語りと共通点を持っていても、不思議ではない。

ところで、マイケルの語りとディケンズの朗読に共通してうかがえる一人芝居のような側面は、ディケンズが若い頃に夢中になったある役者の芝居が起源ではないかと考えられる。次にあげるのは、ディケンズの公開朗読につい

での、当時の新聞の批評の一部である。

全盛期の先代マシューズでも、さまざまなロンドンの生活の一面を、ディケンズによるギャンプ夫人のモールド家の描写ほど典型的に表した場面は見られなかったろう。(9)

……登場人物を演じる際の彼[ディケンズ]の声と態度の素早い変化は、先代マシューズについてわれわれが読んで知っている内容とほとんど同じである。(10)

ここで名前を挙げられている先代マシューズとは、チャールズ・マシューズ(Charles Mathews, 1776-1835)のことで、ディケンズは一時、マシューズが舞台に出ていれば必ず見に行っていたほどだった(11)。

喜劇役者マシューズの芸はモノポリローク(monopolylogue)と言われるもので、短い芝居の全ての役を舞台上で一人で演じる、一人芝居である。衣裳も声も次々に変えながら何役もこなす器用さと素早さが、彼の売り物だった。これは、先に挙げた、ディケンズの公開朗読について何人かが語った感想に相通じる。そして、これもまた無理もないことだった。

ディケンズは幼い頃から演劇に親しんでおり、アクロイド曰く「幼いディケンズの想像力が育まれたのは、そのような[一九世紀初めの劇場の]中でのことだった」(12)。子どもの頃から劇場に連れて行かれていただけでなく、自分でも、家族やその友人たちの前で寸劇を演じたり、歌を歌ったりしてほめられるのが好きだった。演劇とのつながりは、ディケンズ一家が経済的に困窮していた時期に一時途切れるが、学校を出て弁護士事務所で働くようになると復活し、彼はほとんど毎晩のように劇場へ通った。民法博士会館(ドクターズ・コモンズ)で報道記者の仕事をしている頃は、役者になることすら考えた。実際、一八三二年にはコヴェント・ガーデン劇場のオーディションを受けようとしていたほどだった。結局は、当日ひどい風邪をひいてしまい、オーディションは受けられなかったのだが、この時に彼が用意していた出し物は、チャールズ・マシューズのモノポリロークだったのである。この頃のディケンズは役者になるために、一日に何時間も台詞や動きの練習をしたという。部屋の出入りや、ただ椅子に腰をかけるというような単純な動作までも、何度も繰り返し練習した、と後にディケンズは語っている(13)。

役者ではなく職業作家となっても、ディケンズの芝居好きは変わらなかった。一八四五年には、年老いた作家や、作家の遺族のためのギルドを作ろうと慈善公演を計画し、家族や友人を総動員しての素人芝居を始め、自分でも舞台に立った。素人芝居とはいっても、好評を喫したという理由で(慈善公演ではあったが)地方公演まで行っている。

作家が役者として公の場で舞台に立つことには、たとえそれが慈善公演であったとしても、批判的な意見もあり、あまり一般的なことではなかった。たとえばサッカー(W. M. Thackeray)は、文学ギルドなるものには懐疑的で、いわんやそのための芝居公演などんでもない、という立場だった。「そんなものは、われわれ作家の職業の威厳に反する」(14)というのである。このサッカーの態度は、彼が役者という職業を作家より一段低く見ているところから来ている。役者や芝居を低く見るのは、サッカーに限ったことではなく、ヴィクトリア朝の英国社会には広く見られた態度であった。ジョン・フォスターによるディケンズの伝記の中にも、作家という「より高級な職業」に就いたディケンズが、役者という「低級な」職業に惹かれるのを、フォスターがとまどいを露にしながらも弁護する記述がしばしば見られる(15)。フォスターは、この同じ理由から、つまり作家が役者のまねごとなどすべきではないという理由から、ディケンズが有料の公開朗読を始めることに反対したのだった。フォスターにとっては、公の場で舞台に立って朗読し、収入を得るということは、職業役者に一段と近づくことであり、友人であり作家として尊敬もしていたディケンズがそのようなことをするのが耐え難かったのである。

ディケンズの素人芝居の慈善公演は一八五七年まで続いたが、翌年から、彼の演劇に対する情熱は公開朗読に発露を見出した。なぜ公開朗読か、という点について、ディケンズの伝記作者らが共通して挙げているのは次の理由である。すなわち、この時期、彼は私生活の問題で悩んでおり(16)、その悩みから逃れるためにも仕事に専心したかったのだが、『リトル・ドリット』(Little Dorrit, 1855-7)上梓後、なかなか新しい小説にとりかかることができなかった。そこで、執筆活動の代わりに、以前持ちかけられた公開朗読に手を染めることにしたのである。(一八五三年の、慈善活動の一環としての公開朗読会が大変好評で、その後あちこちから有料での公開朗読会開催を持ちかけられていたのである。)公開朗読による収入は、子沢山のディケンズにとっては大きな魅力であった。また公開朗読会を開けば、「たとえ新しい小説を書くことで読者とのつながりを取り戻せなくても、なお読者との密接な関係を保つことができた」(17)からでもあった。

ディケンズはそれまで小説の分冊発行、雑誌の編集・発行などを通じて、読者の反応を敏感に察知し、それをまた自分の創作活動に反映させてきた。幼い頃のディケンズが人前で歌や芝居を披露しては、皆を楽しませてほめてもらおうとしたように、小説家ディケンズも、物語を語って聞かせる相手、反応を示してくれる読者を必要とした。そのようなディケンズにとって、公開朗読というのは自然な思いつきでもあったろう。実際、彼の公開朗読を聞いたある

新聞の批評家は、次のように書いている。

「……彼 [ディケンズ] が今していることは、彼が生涯ずっとしてきたことからみて自然の成り行きに過ぎない。この朗読を聞いたという事は、円熟したある偉大な才能の自然な表現を目撃した、ということなのである。」(18)

実際ディケンズは、公開朗読を始める以前から、自作を家族や友人に読んで聞かせては、反応を見たり、感想を聞いて執筆活動の参考にしていたのである。

ディケンズにとって自作の公開朗読が自然な成り行きだったのは、読者との関係においてばかりではなく、創作スタイルそのものに彼の演劇熱が深く影響していたためでもある。フィリップ・コリンズは前述の著書の中に、ディケンズについてのある有名なエピソードとして、作家の長女メイミー (Mamie) の話を引用している。

あるときメイミーは、執筆中のディケンズの書斎に座っていることを許された。ディケンズは鏡のところへ走って行っては、鏡の前で「恐ろしく顔を歪め」、同時に「低い声で早口に何事が呟く」と、机に戻って書いた。それは、いわば、執筆の直前に行われたプライベート・「リーディング」だったのだ。しかも、この逸話はディケンズの円熟期のものなのである。彼は鏡の前で『辛い時代』(Hard Times, 1853-4) を演じていたのだ。(19)

小説の語りにおいて、読者を「聴衆」として意識していただけでなく、人物の造型・描写においても、ディケンズは役者が演じているところをイメージして、あるいは右のエピソードにあるように自ら演じて確認しながら、筆を進めていたようなのである。登場人物の表情と台詞は、朗読の時と同じように、ここでも大切だった。モノポリローグさながらに、彼はさまざまな人物を鏡の前で演じていたのだ。彼が夢中になり、真似ようと練習までしたマシューズのモノポリローグは、小説家ディケンズの中にも生きていた。彼の作品のこのような一面が彼を公開朗読へと向かわせたのであり、その公開朗読はやはり自然とモノポリローグの趣を持っていた、というわけである。

「貧しい親戚の話」における、一人芝居を思わせるマイケルの語りは、まさにディケンズの朗読スタイルだった。また、聴衆の反応を確かめながら話すマイケルには、やはり聴衆あるいは読者の反応を敏感に察知するディケンズの姿が重なってくる。こうしてマイケルの語りは、ディケンズの公開朗読や、その起源となったモノポリローグへと辿る道筋を示している。そして、モノポリローグを含む演劇への情熱が彼の小説世界に少なからぬ影響を与えていること、ディケンズにとって物語を「語る」とは、まさに読者を聴衆に見立てて語ることだということを考え併せると、この小さな物語は、ディケンズの作品世界の魅力の一面を解明する糸口となっているのである。

テキスト

Charles Dickens, 'The Poor Relation's Story' in *The Christmas Stories*, edited by Ruth Glancy, Everyman Dickens (London: Dent, 1996). 引用文の頁はすべてこの版による。

註

(1) 'poor relation' とは「《同類の中で》劣っている人 [もの]」(『リーダーズ英和辞典』) の意味であり、'The Poor Relation's Story' の語り手マイケルは「一族の中での出来損ない」ということになる。だが、本稿では、マイケルの暮らしぶりをも考慮して、'poor relation' を「貧しい親戚」と訳す。

(2) Deborah A. Thomas, *Dickens and the Short Story* (London: Batsford Academic and Educational Ltd., 1982), p. 69, p. 71.

(3) これはもちろん「空中楼閣 (castle in the air)」という表現を踏まえている。

(4) Cf. Introduction to *The Christmas Stories* (London: Dent, 1996) by Ruth Glancy, p. xxii. Thomas, p. 63.

また、クリスマス物語に限らず、ディケンズのストーリー・テリングの手法における『千一夜物語』の影響を指摘している文献には次のものがある。

Angus Wilson, *The World of Charles Dickens* (London: Granada Publishing, 1983), pap. edition, p. 23.

(5) Peter Ackroyd, *Dickens* (London: Sinclair-Stevenson, 1990), pp. 982-3.

(6) Philip Collins (ed.), *Charles Dickens: The Public Readings* (Oxford: Clarendon Press, 1975), p. lv.

(7) John Forster, *The Life of Charles Dickens* (London: Chapman and Hall, 1911), vol. II, p. 288.

- (8) Ackroyd, p. 803.
- (9) Glasgow Herald, 11 October 1858. (Reprinted in Collins, p. xvii..)
- (10) Macmillan's Magazine, January 1871. (Reprinted in Ackroyd, p. 139.)
- (11) Forster, vol. I, p. 394.
- (12) Ackroyd, p. 36.
- (13) Forster, vol. I, p. 394.
- (14) Ackroyd, p. 630.
- (15) Forster, vol. I, p. 39.
- (16) ディケンズは、一八五七年の素人劇団の地方公演に参加した若い女優エレン・ターナン (Ellen Ternan) と恋に落ちてしまい、それが原因となって翌年には妻キャサリンと別居する。
- (17) Ackroyd, p. 802.
- (18) New York Tribune, 10 and 11 December 1867. Reprinted in Collins, p. liii. Also, in Ackroyd, p. 986.
- (19) Collins, p. lix.